

原 著

障害児保育拠点園における障害児の対人関係

奥山清子¹⁾ 花谷香津世²⁾ 板野美佐子³⁾

ノートルダム清心女子大学 家政学部 児童学科¹⁾

就実短期大学 幼児教育学科²⁾

旭川児童院³⁾

(平成5年11月17日受理)

Social Interaction of Handicapped Children Receiving Designated Mainstreaming in Nursery School

Kiyoko OKUYAMA¹⁾, Katsuyo HANATANI²⁾ and Misako ITANO³⁾

*Department of Child Welfare
Notre Dame Seishin University¹⁾
Okayama, 700, Japan*

*Department of Early Childhood Education
Shyujitsu Junior College²⁾
Okayama, 703, Japan
Asahigawa Jidoin³⁾
Okayama, 703, Japan
(Accepted Nov. 17, 1993)*

Key words : social interaction, isolated behavior, teacher initiation,
degree of impairment

Abstract

Early childhood mainstreaming has been a topic of intense interest. Today, integrated education is available not only to those children who are moderately handicapped, but also to those who are severely handicapped. In Okayama City, this mainstreaming is now being introduced at the nursery school level. How handicapped children grow and develop with their peers is the main concern. We observed and video-recorded the social behavior of handicapped children in a free play situation. Twenty one handicapped children were recorded on three separate occasions, with 4-month intervals : July and November 1992 and March 1993. Changes in the social behavior of the handicapped children were checked every 15 seconds. They were divided into one of 4-categories of isolated behavior, including unoccupied and solitary behavior ; onlooker behavior ;

parallel play ; and associative and cooperative play. Isolated behavior was observed mostly in mentally retarded children. Being in nursery school, they had the opportunity to contact and associate with nonhandicapped children. But it was the teacher who made the handicapped children associate with other children. Verbal communication and physical contact initiated by the teachers were great factors leading to these changes. Isolated behavior was compared between moderately and severely handicapped 4-year olds and 5-year olds. The incidents of isolated behavior among the severely handicapped children did not decrease, but among the moderately impaired children a marked decrease in isolated behavior was observed. Therefore, it is the degree of impairment, not the age, that is the determining factor.

要 旨

障害児と健常児がともに育ちあうことを目指す統合保育への関心が高まっている。今日では、統合保育は重度化、多様化している障害児にも及んできている。岡山市に設置されている障害児保育拠点園においても同様の傾向が認められている。このような障害児保育では、それぞれの成長を促すために、さまざまな試みがされている。障害児が保育園でどのような経過を辿って、「友人を持ち、育っていくのか」は大きな関心事であるといえる。そこで、著者らは、幼児にとって生活そのものである自由な遊び場面における障害児の対人行動を、VTRを用いて録画し、7月、11月、3月の4か月ごとの変化を検討した。その結果、障害児の対人行動を形態的に、孤立的、傍観的、平行的、集团的行動に大別すると、孤立的行動が圧倒的に多く見られた。孤立的行動が多いのが、障害児の特徴であったが、その中でも一人で動き回る単独行動がめだった。集団生活を重ねるにつれ、単独行動から、遊びへの関わりができるようになった。障害児が集団の遊びの中へ入ったのは、保育者からの声掛け、接触が契機になっていた。また、孤立行動の頻度を障害の程度別に4歳児と5歳児を比較すると、障害の程度によって、孤立的行動の現れ方に違いが見られたが、年齢による差はほとんど見られなかった。

緒 言

障害児が健常児と共に保育される統合保育への関心は高まり、障害児のみが分離されて保育されることへの批判は大きいものがある。ここでいう統合保育は、障害児と健常児が単に共に生活するというのではなく、共に生活することについての理念と方法があるものを統合保育とよんでいる¹⁾²⁾³⁾。この考え方はほぼ定着している。

岡山市では、昭和51年より障害児を積極的に受け入れるために、定員120名規模の保育園に6～8名程度の障害児を受け入れ、専任の保育者3名が保育にあたることになった。現在、岡山市の88保育園のうち、市内中心部に3園、周辺

部へ3園、計6園の一定数の障害児を常時受け入れる地域の障害児保育拠点園がある。これらの保育園では障害を持つ子どもたちと、持たない子どもたちが共に育ちあうことを目指している。入園当初すなわち4月、5月は、3歳以上の障害児8名に対し、3名の専門的研修をつんだ保育者が行う、小人数のグループ遊びや、集団への適応力を高めるための諸活動、感覚、統合訓練などを一人の障害児に一人の保育者が行う個別指導などが中心となっている。その後、治療保育の成果が拳がるとともに、可能な限り早い時期に集団での生活の比重を大きくしている。田中⁴⁾は全国的に統合保育の対象児の低年齢化や重度化、障害の多様化が進んでいると述べているが、岡山市においても最近では、障害児

保育拠点園での統合保育がすすむにつれ、かなり重度な障害児が入園している。しかも、保育の対象となる幼児の障害の種類や状態は多様であり、個別的、臨機応変的な対応が求められる。ふさわしい保育方法のあり方を求め、保育者は専門家の助言を得ながら努力を続けている。保育方法と子どもたちの発達変化との対応についての研究は今日的課題となっている⁵⁾⁶⁾⁷⁾。Strain⁸⁾は、精神発達遅滞児をはじめとする障害児の対人行動には、社会的スキル欠如から生じる仲間とのやり取りや友達作りの機会を失うなど適応上の問題があることを指摘している。

幼児にとって遊びは生活そのものであり、自発的かつ自由な活動である。障害児も健常児もともに遊びを通して諸能力を獲得し、遊びを通し、人と人とのかかわり方の基本を学び、身につけていく。そこで、本稿では、この自由な活動である遊び場面に見られる障害児の対人行動にはどのような特徴があるのか、障害児に多く

見られる一人で動き回る孤立立行動の内容を探り、時間的経過にともなう変化に及ぼす要因を検討した。

方 法

1. 対 象

観察対象は、岡山市の障害児保育拠点園6園のうち無作為に抽出した4園に在園する障害児32名である。4園における障害児数は、いずれも8名で、各園の園児数および障害児の占める割合は、表1に示した。

障害児32名のうち、ここでは連続して観察することができた21名について報告する。対象児の年齢は5歳児7名、4歳児8名、3歳時6名で、男児は18名、女児は3名である。障害の種類は、精神発達遅滞18名(重度1名、中度6名、軽度11名)、知的障害を伴う肢体不自由3名である。

2. 方 法

観察は、保育に経験のある複数の観察者により実施した。観察期間は1992年7月から1993年3月までの7月、11月、3月と約4か月ごとに行った。観察場面は、障害児と健常児がともにあそんでいる午前9時から10時30分までの朝の自由遊びを中心に障害児一人ずつについて、10分間の行動観察を行いVTRで録画した。

録画時間は1分間を15秒単位で4場面に分け、一人40場面を4か月ごと3回、合計120場面を対

表1 対象園の園児数および障害児数

対象園	園児数	障害児数	障害児の割合 %
A園	173	8	4.0
B園	125	8	5.6
C園	64	8	12.5
D園	140	8	5.7

表2 行動の分類基準

孤立的行動	10 孤立行動 (なにもしないでじっとしている) 11 単独行動 (一人で動きまわる) 12 単独遊び (他児とは異なるおもちゃで一人で遊ぶ)
傍観的行動	20 傍観行動 (周囲の人や出来事を見回す、ぼんやり見ている) 21 注目・対物 (周囲の物に注視、注目する) 22 注目・人・現象 (周囲の人や出来事を注視、注目する)
平行的行動	30 平行遊び (他児、他者の傍らで一人遊びをする) 31 模倣遊び (他児、他者の模倣をする) 32 接近行動 (他児、他者に近づく、あるいはその周囲をうろつく)
集团的行動	40 保育者による同調行動 (保育者から働きかけられて一緒に行動する) 41 他児による同調行動 (他児から働きかけられて一緒に行動する) 42 自らによるかかわり (自分から他児、他者にかかわろうとする)

人行動の形態別に分類した。分類の基準はParten⁹⁾の対人行動の分類にしたがって、表2のように孤立的、傍観的、平行的、集团的行動の4つに分類し、さらにそれぞれを3段階に細分し検討した。

結果と考察

表3は、21名の障害児の対人行動2200場面を形態別および調査期間別にみたものである。全体からみると、孤立的行動は1064回で、全行動の47.6%、約半数を占めていた。他児と類似したおもちゃで、他児の傍らで遊ぶ平行的行動は519回、22.4%であった。保育者や他児からの働きかけで一緒に行動したり、自分から他児にかかわろうとする集団行動は374回で18.4%、遊んでいる他児をじっと見ている傍観的行動は243回、11.6%であった。孤立的行動が最も多くみられたのが特徴である。才木敦子¹⁰⁾は、幼稚園における3歳の新入園児の孤立的行動の割合が2.31%であったことを健常児の自由遊びの観察から報告している。今回の観察における障害児の孤立的行動の割合は47.6%であった。しかし、時間的経過を追って孤立的行動の回数や内容を検討したところ、この割合は恒常的なものでないことが明らかとなった。

表4に示した通り、障害児の孤立的行動の回数は7月には404回、55.7%であったのが、11月には343回、45.2%、3月には317回、44.3%と徐々に減少している。時間的経過にともなう行動内容の変化を検定(X²検定)したところ、7月と

11月、11月と3月の間にそれぞれ1%水準で有意差が認められた。

また、孤立的行動の内容を表2の分類基準に従って分析してみると、一人で動き回る単独行動は538回、53%で最も多くみられた。次に一人で遊ぶ単独遊びが383回、39%と続き、一人でじっとしている孤立行動は143回で17%であった。遊び場面にみられる障害児の行動が一人で動き回るような孤立的行動によって全行動の約半数近くが占められている事実は、障害児保育拠点園における保育の困難さを示すものである。これらの孤立的行動は、時間的経過にともなってすべての行動が徐々に減少するとか、増加するといった一定方向へ向かっての変化を直線的にたどっているとはいえない。しかし、一人でじっとしている孤立行動は、孤立的行動のなかでも17%を占めているにすぎないが、7月と3月を比較してみると、7月には42回あったのが、3月には25回みられただけとなっている。孤立的行動の半数以上を占める単独行動においても、7月の194回が3月には144回、単独遊びにおいても、7月の168回が3月には、148回とそれぞれ減少している。変化はわずかであり、進歩は緩やかであるが前進していることが確認できた。これら孤立的行動の減少は他の平行的行動、集团的行動との関わりでとらえていきたい。

他児と類似したおもちゃで、他児の傍らで遊ぶ平行的行動は、時間の経過につれまた集団行動を重ねるにつれ、段々と増加している。保育者や他児の模倣が見られたり、保育者や他児への接近する行動にも差が見られた。

表5に示したように、集团的行動の4か月ごとの変化を見ると、保育者から働きかけられて

表3 4か月ごとの行動内容

	回数 (%)			
	全体	7月	11月	3月
孤立的行動	1064 (47.6)	404 (55.7)	343 (45.2)	317 (44.3)
傍観的行動	243 (11.6)	67 (9.3)	118 (15.5)	58 (8.1)
平行的行動	519 (22.4)	127 (17.5)	186 (24.5)	206 (28.8)
集团的行動	374 (18.4)	127 (17.5)	112 (14.8)	135 (18.9)

** p<.01

**

表4 孤立的行動内容の4か月ごとの変化

	全体	7月	11月	3月
孤立行動	143	42	76	25
単独行動	538	194	200	144
単独遊び	383	168	67	148
合計	1064	404	343	317

** p<.01

一緒に行動する同調行動は7月には80回であった。11月には、62回、3月には33回と減少していた。逆に、他児から働きかけられて一緒に行動する同調行動は、7月には6回だったものが、11月には3倍の18回、3月には約6倍の38回と飛躍的な伸びを示している。

時間的経過にともなう行動内容の変化を検定(X²検定)したところ、7月と11月の間には差が認められなかったが、11月と3月、7月と3月の間にそれぞれ1%水準で有意差が認められた。障害児自らが他児、他者へかかわった行動は、全体から見ると6%にすぎない。7月と11月にはわずかな伸びがみられるだけである。11月と3月の間には2倍の増加が見られる。自らによるかかわりにおいても保育者へのかかわりの方が、他児へのかかわりを上回っていた。広利吉治ら¹¹⁾は、保育所内の対人関係発展過程を分析すると、自閉症児においても、健常児においても、まず、保母への交渉および愛着行動の増加が見られ、その後に保母との関係を基盤にした他児への交渉量の増加が見られると述べている。今回の観察においても、保育者へのかかわりが最初に発生し、他児とのかかわりあいはその後に認められた。

集団的行動の中では、障害児が自分から他児に関わろうとする場面は少なく、保育者からの声かけ、接触が契機となって、障害児が集団の遊びのなかに入って行く場面がほとんどであった。7月や11月には保育者からの働きかけで障害児は集団の遊びにやっと入ることができていた。3月には保育者からの働きかけも行われてはいるものの、健常児や障害児同士のかかわりによる遊び場面の増加が見られた。いずれの観

察場面においても、保育者の側から障害児に対して、声掛けや、身体的接触は常に行われていた。健常児に対しては、とくに散歩や水遊び、少人数のゲームなど毎日の生活で手を繋ぐことなどが、さまざまな機会を利用して積極的に行われていた。このような意図的な働きかけだけでなく、遊びながら知らず知らずのうちに触れ合いが生まれる場面は、運動会のような園をあげて取りくむ行事が行われた後に数多く見ることができた。

障害児の統合保育においては、単に障害児と健常児の保育の場を一緒にするだけでなく、意図的な教育的介入が必要であることを示唆するものである。

乳幼児の活動を社会的な側面からとらえようとする Parten を初めとする諸研究によると、孤立的行動や傍観的行動、平行的行動は年齢と共に減少し、かわりに集団的な活動が増加することが確かめられている。表6は行動内容を年齢別に見たものである。今回の観察結果からはそれぞれの年齢間に差は見られなかった。

図1は、孤立的行動内容の回数を4歳児と5歳児の間で、障害の程度別に比較したものである。障害の程度によって、孤立的行動内容の現れ方に違いがあるかどうか検討したところ、4歳児においても、5歳児においても中度と軽度の間に、1%水準で有意差が認められた。しかし、4歳児と5歳児の間には、年齢による差は認められなかった。中度の障害児は、一人で歩き回る単独行動が一人で遊ぶ単独遊びの2倍となっていた。また、軽度の障害児の場合、4歳児においても5歳児においても、単独遊びの方が多くみられた。障害が軽度のほうが遊びに関わりやすいという傾向があった。つまり、障害

表5 集団的行動の4か月ごとの変化

	全体	7月	11月	3月
保育者による同調行動	175	80	62	33
他児による同調行動	56	6	12	38
自らによるかかわり	133	31	38	64
合計	374	127	112	135

ns ←
← **

** p < .01
← **

表6 年齢別行動内容

	%		
	5歳	4歳	3歳
孤立的行動	49.5	42.4	54.0
傍観的行動	8.9	13.0	11.8
平行的行動	22.3	25.9	19.9
集団的行動	19.3	18.7	14.3

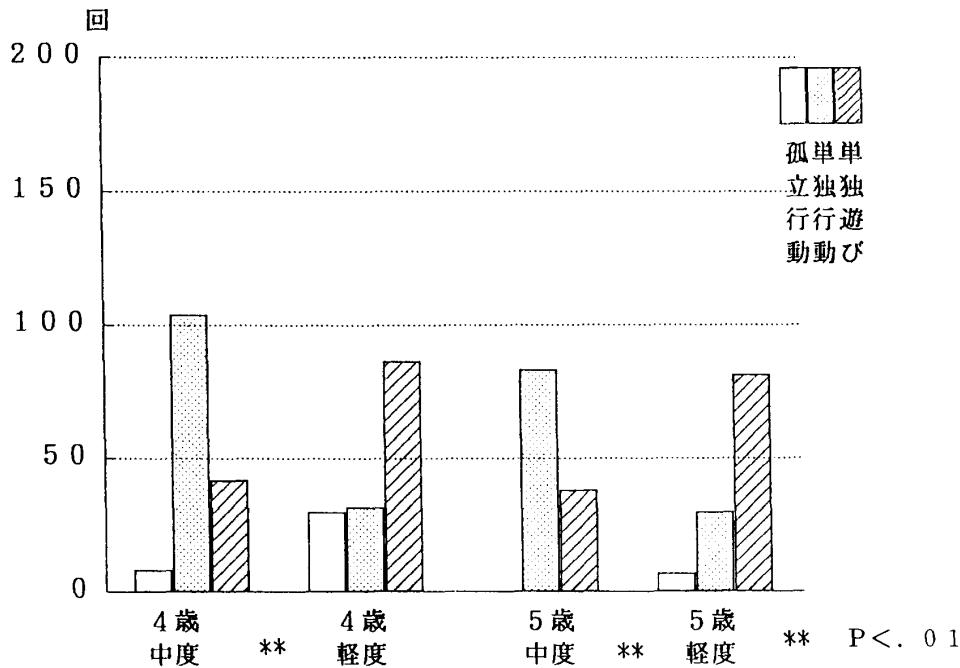


図1 障害の程度別孤立行動回数

の程度が、軽度のほうが、中度に比べ、対人行動が未成熟から成熟の方向へ、すなわち、プラスの方向へ作用していると考えられる。松阪清俊¹²⁾は、統合保育において発達障害幼児の心身の発達の遅れが軽度の者の発達の変化が比較的容易で、重複障害児や重度精神遅滞児の発達の変化の困難性を指摘しているが、今回のわれわれの観察においても同様の結果を得た。

結 論

遊び場面の観察を通して、障害児保育拠点における障害児の対人行動に変化を及ぼすものとして、障害児の年齢よりも、障害の程度が関与していると考えられる。当然のことではあるが、障害の程度が軽度のほうが、中度に比べ、対人

行動が未成熟から成熟の方向へ、すなわち、プラスの方向へ作用していると考えられる。必然的に対人行動が求められる遊びや、運動会など、障害児、健常児、保育者だけでなく保護者まで一体となって取り組む園行事への参加などを契機として、健常児からのはたらきかけで障害児の遊びに進展がみられた。また、経験豊かな保育者からの障害児への声掛け、接触などの働きかけも大きく関与していたと考えられる。

本論文の要旨は、第2回中国四国小児保健学会(1993)において発表した。

擱筆するにあたり、調査にご協力いただいた障害児保育拠点の諸先生方に感謝を申し上げたい。

文 献

- 1) 石井哲夫 (1992) 障害児に対する保育の現状と課題. 障害児保育研究会編, 保育所における障害児への対応, 初版, 全国社会福祉協議会, 東京, pp 21-22.
- 2) Jenkins JR, Odom SL and Speltz ML (1989) Effects of Social Integration on Preschool Children with Handicaps. *Exceptional Children*, 55(5), 420-428.
- 3) Guralnick MJ and Groom JM (1988) Peer Interactions in Mainstreamed and Specialized Class-

- rooms : A Comparative Analysis. *Exceptional Children*, **54**(5), 415—425.
- 4) 田中良三 (1991) 統合保育とは何か. 全国保育問題研究会編, 障害児保育, 初版, 新読書社, pp. 13—52.
 - 5) 広利吉治, 渡辺 純, 松本和雄, 西村 健, 自閉症児の愛着行動とその指導——保育集団内における対人交渉の分析. 小児の精神と神経, **30**(1・2), 67—76.
 - 6) 園山繁樹, 秋元久美江, 板垣健太郎, 小林重雄 (1989) 幼稚園における自閉性障害児のメインストーリーミング——機会利用方指導の試み. 特殊教育研究, **26**(4), 21—32.
 - 7) Perterson, NL and Haralick JK (1977) Integration of Handicapped and Nonhandicapped Preschoolers : An Analysis of Play of Behavior and Social Interaction. *Education on Training of Mentally Retarded*, **12**, 235—245.
 - 8) Strain PS and Timm MA (1977) Effects of Peer Initiations on the Social Behavior of Withdrawn Prechoolers. *Journal of Applied Behavior Analysis*, **10**, 289—298.
 - 9) Parten MB (1932) Social Participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social psychology*, **27**, 243—269.
 - 10) 才木敦子 (1991) 新入園児の適応過程における対人関係について. 日本保育学会第44回大会論文集, 568—569.
 - 11) 広利吉治, 渡辺 純, 松本和雄, 西村 健, 自閉症児の愛着行動とその指導——保育集団内における対人交渉の分析. 小児の精神と神経, **30**(1・2), 67—76.
 - 12) 松阪清俊 (1985) 統合保育における発達障害児の発達的变化. 発達障害研究, **6**(3), 208—220.